

中等教育研究開発室年報 第35号（2022年3月31日発行）別冊電子版
2021年度 授業実践事例

国語科 高等学校第Ⅰ学年

感想からはじめる読みの授業—「ラップトップ抱えた『石器人』を読む—
「ラップトップ抱えた『石器人』」『国語総合 現代文編』（東京書籍）

授業者 重永 和馬

（校内研究授業）

広島大学附属中・高等学校

高等学校 国語科 学習指導案

指導者 重永 和馬

- 日時** 令和4年1月20日(木) 第6限
- 場所** 多目的教室
- 学年・組** 高校1年1組42人(男子20人 女子22人)
- 単元** 感想からはじめる読みの授業 ―「ラップトップ抱えた『石器人』を読む―
「ラップトップ抱えた『石器人』」『国語総合 現代文編』(東京書籍)
- 目標**
1. 文、話、文章の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解すること。
([知識及び技能] オ)
 2. 目的に応じて文章に含まれている情報を相互に関係付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりするとともに、自分の考えを深めること。([思考力, 判断力, 表現力等] Cのイ)
 3. 言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。([学びに向かう力, 人間性等])

指導計画 (全3時間)

第一次 教材文を読んで、初読の感想をプリントに記入する。(1時間)

第二次 生徒の感想をもとに、教材文を読む。各時の終わりに感想をプリントに記入する。

(2時間, 本時は1/2時間目)

授業について

教材「ラップトップ抱えた『石器人』」は2003年に新聞記事として書かれた評論文である。科学技術文明の中を生きる我々を、「ラップトップ」を抱えた「石器人」と喩えて、謙虚な自己認識が必要であると主張する。科学技術文明が進歩する一方で、個々の人間の脳は進化していない。この点を自覚せず、自分の力で科学技術文明を扱えると思込んでいる現代人を、筆者は批判的にとらえている。ここに、筆者の個性がある。筆者の考えをもとに、現代人のあり方と科学技術のあり方について学習者に考えさせたい。一方で、謙虚な自己認識に基づいた場合、今後科学技術をどのように進歩させていけばよいのかという点についての明確な言及はない。そのため、「どうすればいいのか」という疑問を学習者は持つ。科学技術と人間の関係という点について、考えを深めさせたい。

これまでも学習者の能動的な学習活動を重視した実践を行ってきた。今回の実践は学習者の感想をもとにした授業を行った。能動的な学習の成立は、教材と学習者の接点を築き、その接点を授業の中で論点として活用することによってなされると考える。初読の感想を書くことに加えて、各時の終わりにワークシートに感想を書くこと、指導者がその感想をもとに論点を作ることを実践にあたって意識したい。

題 目 感想からはじめる読みの授業 —「ラップトップ抱えた『石器人』を読む—

本時の目標

1. 文章の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解する。
2. 教材文の表現や内容について、他の学習者の感想を参考にしながら自分の考えを作り上げる。
3. 科学技術と人間の関わりについて考えを深めている。

本時の評価規準（観点／方法）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・文章の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解している。（発言・記述の確認）	・教材文の表現や内容について、他の学習者の感想を参考にしながら自分の考えを作り上げることで、文章を評価や解釈している。（発言・記述の確認）	・科学技術と人間の関わりについて考えを深めようとしている。（発言・記述の確認）

本時の学習指導過程

学習内容	指導上の留意点	評価の観点と方法
<p>〈導入〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前時と本時の内容の確認。 <p>〈展開〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文章後半を読む。 1, 人間の脳の進化について考える。 2, 科学技術の進歩について考える。 3, 科学技術と人間の関わり方について考える。 <p>〈終結〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次時の内容の確認。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「ラップトップ抱えた「石器人」の後半を読むことを確認する。 ・教材文後半を音読する。 1, 筆者が人間の脳は進化していないとしていることを押さえる。 ・人間の脳が進化しているかいないかについて考える。 2, 筆者が科学技術の過度の進歩を否定的にとらえていることを「だまされてはいけない」「築きあげてしまった」という表現をもとに押さえる。 ・科学技術の進歩は否定的なことなのかどうかについて考える。 3, 科学技術と今後どのように関わるべきかについて考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・脳の進化について考え、発表できている（発言・記述の確認）。 ・文章の効果的な組み立て方や接続の仕方について理解し、内容を読み取っている（発言・記述の確認） ・科学技術の進歩について考え、発表できている（発言・記述の確認）。 ・科学技術と今後どのように関わるべきかについて考え、発表できている（発言・記述の確認）。

実践上の留意点

1. 授業説明

本実践は生徒の感想を起点として読みを深める実践である。教材全文を載せた感想記入用のワークシートを用いた。感想をもった箇所に線を引き、感想とその説明を書く。全文を載せたのは、教材のどの部分に感想を持ったのかを明確にすることにつながるからである。また感想の記入は初読段階だけでなく、各時にも行うようにしている。授業を受けることで、生徒の感想はより豊かになる。それを生徒が記し、指導者が次時に生かすことで授業の深まりが生じると考えているからである。

本時は文章後半の読解である。生徒の記していた感想をもとに、現代人の進歩について、科学技術文明の進歩について、今後の科学技術の進歩について、考えていく授業を行った。全体的に生徒は能動的に学習に取り組んでいた。

ワークシートの記入を見ると、学習者は教材文への感想を多く持っていた。感想を持つという点で、生徒は能動的に教材文と関わっていた。

2. 研究協議

授業後の協議会でいただいた質問・意見のうち、三点について説明する。一つ目は、教材文の読みについてである。科学技術文明の進歩について、筆者は否定的にとらえていると私は読んでいた。しかし、筆者は否定的にとらえてはおらず、文章中にあるとおり「すばらしい」ととらえているのではないかという意見をいただいた。さらに、私たち現代人が、科学技術文明を扱いきれると錯覚していることについて否定的である点を、授業の柱にすべきだという意見をいただいた。私は授業の柱として、謙虚な自己認識をした後、私たちは科学技術文明とどのように関わるべきかということを据えたが、柱を間違えていることになる。教材の書いていることを踏まえきれていない実践であった。

二つ目は、指導者の教材研究・教材解釈が、生徒の感想よりも強く出ているのではないかという指摘である。生徒の数多くの感想すべてを授業でとりあげることは難しい。そのため、授業で取り上げるものを選ぶが、その段階で指導者の選択が入ってくる。また、その感想をどのような順序や重みでとりあげ、どのように板書するのかという点も、指導者の考えによる。今回の実践で言えば、授業で生徒に考えさせた論点が、指導者側の読みにもとづいて、強引に設定されているのではないかということである。指導者の教材解釈がまったく入らない実践はありえないが、それが強く出ていた面がある。生徒の感想を生かす実践がどのような授業なのかについて、今後探る必要がある。

三つ目は、能動的な読みと妥当な読みの関係をより明確にすることである。私は能動的な読みを、読者が自分と関わらせて文章を読むことだと考えている。自分に関わらせれば関わらせるほど、読みは個性的なものになる。一方で、正しい読み、妥当な読みというのがある。妥当な読みというのは、自分を前面に出すのではなく、コードに従った読みである。本教材で言えば、全体の段落構成や「しかし」に注目する読みである。この両者の関係が協議会では話題になった。妥当な読みを行って立脚点を築いた上で、能動的な読みを行うべきだという指摘である。感想を起点にするような学習者発の学習をする際に、学習者の個性的な読みを引き出すことはできる。そのような学習の中で妥当な読みをどのように位置づければよいのか、関わらせていけばよいのかということについて、今後検討が必要である。